冴返る

冬休みに帰省していたメイはトラックに轢かれて、死んだ。夕方、旧街道を歩いていた彼女に居眠り運転のトラックが突っ込んだらしい。即死だった。

メイとは恋人同士だった。大学に入学したてのころから、同じクラスということもあって、課題を一緒にこなしたり、ご飯を食べたりするうちにいつしか付き合うようになった。僕とメイは共に下宿をしていたから、いつでも頻繁に会えた。帰省する前のクリスマスも一緒に過ごした。残念ながら雪にはならず、朝から土砂降りの雨で気分を憂鬱にさせた。そんな日に彼女は雨真っ白なワンピースを着てくるのだから、僕は苦笑した。理由を尋ねると、雨の日は気分が滅入っちゃうから、とっておきを着ることにしてるんだ、と答える。雨も跳ね返してしまうような彼女が好きだった。寒さに負けないようぴったりとくっついて歩いて二丁目のパン屋にいってフランスパンとあぐりパンを買った。あぐりは、店主の娘の名前だ。左右に三つ編みをしている六歳の女の子。来年から小学生だ。休日に三人で遊びにいったことがあるくらい仲良しだった。メイはそのあぐりちゃんと、あぐりパンをなにより愛した。それから材料を買って彼女の家でクリスマスパーティをした。夜中過ぎまでテレビを見て、ふいに向かいあったときキスをした。あれが最後のキスだった。彼女が好きだった。大好きだった。

お姉さんからメイが亡くなったというメールを受けても実感もわかなくて、ただ胸に気持ち悪さがこみ上げた。なにかをしなくちゃと、思っても何ができるわけでもなく、六畳の部屋を一周してベットの上に転がった。電球はいやらしいくらいに明るかった。しだいに体中の力が抜け、そのときようやくどっと涙が溢れだした。

その夜は随分長かった。眠らなければ苦しいが、眠ろうとするのも腹立たしくて、結局朝まで起きていた。泣き止んでみても、部屋のそこらじゅうにある彼女との思い出をみつけてはまた涙が溢れた。

でも悲しんでもいられない。葬式にはいかなければならないし、そのためにはスーツや香典を用意したり、彼女の実家のある群馬までの経路を調べたりしなくちゃいけない。でも何かをやっていればメイのことを考えなくて済んだ。

＊＊＊

葬式場には新幹線と電車とバスを乗り継いで、それから歩いてようやく付いた。彼女の住む町でも少し離れた場所だった。

出迎えをしていたお父さんはすらっとした物腰の低そうな感じで、どこか疲れ切っているような顔だった。人がたくさんいる葬儀場では棺はずっと遠くに思えた。葬儀の流れに粛々と従わなければいけない。当然彼女の元に駆け寄ることは許されなかった。会場は見知らない人たちが、メイの死を悲しんでいた。多くはメイの同級生だろう。彼女が関わった人々、彼女が愛し愛された人々だ。その誰もが僕よりも前から彼女のことを知っているんだ。僕だけのために微笑んでくれる彼女はもういない。若い僕たちの若い恋はすぐに相手が変わってしまうような弱い恋だ。夫のように、世界中のだれよりも悲しんでいる顔をしてなくことはできない。僕とメイが付き合っていたことなど、二人の歴史など、この場所にとっては取るに足らないことなんだ。そう思うと

妙に場違いに思えて居た堪れなくなった。知らない遠い場所の知らない人たちの中で、僕は孤独だった。メイがこの場にいてくれたら、どれだけ気分が楽だったろう。一刻も早くこの場所から抜け出したかった。ここに長くいると、二人の思い出が消えてしまいそうで怖かった。お父さんのメイの思い出の多くあるこの場所で葬儀をあげられたことが唯一の救いですという言葉もその心に拍車をかけた。

式の終り前に座っていた女の子が、僕の肩を叩いた。

「惣介君？」

僕がそうだと答えると、また涙を浮かべた。真っ赤な顔だ。

「ごめん。付き合っていたんだってね。芽衣から聞いていて。」

ときどきメイの話にでていた朱美ちゃんだった。それから椅子に座って、話し込んだ。メイは小学生のころ病気がちだったこと、誕生日にくれたプレゼントの話、それとあぐりちゃんの話。家に電話をいれたりしてまで、よそ者の僕に付き合ってくれる彼女は、やっぱりメイの友達なんだと思った。僕はこれだけ優しくあれただろうかと考えて自分が嫌になった。

家に戻ってから、時間はすぐに過ぎた。自分の親には悟られたくなかったし事情を知っている友達に同情をかけられるのも辛抱ならなかった。下宿の部屋は一人で悲しむには環境が良すぎて、誰にもあわずオンラインゲームばかりして過ごした。気づけば年は新しくなり、春休みが始まり終わった。

僕は二回生になった。履修登録に、進路に容赦なくやらねばいけないことが増えていった。

今日は春だというのに随分と寒い。冬並みの気温らしい。寒い日はメイの温もりを思い出す。ゴミで散らかったこの部屋もメイがいればすぐに片付くのにな。

四月十一日、彼女が死んでから付き合っていた期間の半分が過ぎた。オンラインゲームにも飽きてしまった。

集団登校に向かう小学生たちに、あぐりちゃんも入っている。メイをいつまで待っていれるのだろう。

終